

Re:Monster

暗黒大陸編
THE DARK CONTINENT

リ・モンスター

2

金斬兎狐

鍛冶師さん

ほんわかとした雰囲気を持つ癒し系。
武具作りはドワーフ級の腕前。

種族 人間

姉妹さん(姉)

並々ならぬ
料理センスを持つ。
巨乳で右目に
ほくろがある。

種族 人間

姉妹さん(妹)

並々ならぬ
料理センスを持つ。
貧乳で左目に
ほくろがある。

種族 人間

オバ郎^{ろう}

ゴブリンとして異世界に転生した主人公。喰えば喰うほど強くなる【吸喰能力^{アブツキカネリ}】で進化を繰り返し、傭兵団《戦に備えよ^{ウベウヨ}》を率いて新天地へと進出する。

種族 ^{グレイジョウヤクシヤオーバーロード} 金剛夜叉鬼神 ^{ウァイリツカシズ} 現神種

錬金術師さん

知的なクール系美人。
マジックアイテム製作に
定評がある。

種族 人間

赤髪ショート

赤髪がトレードマークの元冒険者。
《戦に備えよ》において、
主力の八鬼に次ぐ戦闘力を誇る。

種族 人間

《七十一日目》

巨人王都《クロニユソス・ティタン》の中央、つまりは王城に招かれた俺——オバ朗と【巨人王】バロル・ドウバズラとの非公式な会談は、昨夜遅くに終わった。

あらかじめ用意されていた小人用貴賓室で一夜を明かした俺と仲間達は、昨日の会談で決まった約束事の一環として、普通なら食べきれないほどの豪華な朝食を楽しんだ。その後、【光武王子】バルドル・ルグ・ドウバズラと【闇法王女】エンデ・サグ・ドウバズラに案内されるまま、王城の一面に存在する《第二宝物殿》へとやってきた。

《第二宝物殿》は王城の中心区画に存在し、巨人族の中でも大柄な【光武王子】達王族でも余裕をもつて入れる巨大な門によって閉ざされている。

内外を隔てる両開きのこの門は銀色に輝き、金と宝石で『大口を開けた龍』と戦う『四腕の巨人』の細工が施されていた。

傭兵団《戦に備えよ》の仲間達

最高幹部【八陣ノ鬼将】

◆カナ美

【氷血真祖・超越種】。オバ朗と共に生まれ育った仲間にして正妻。

◆ミノ吉

【雷牛帝王・超越種】。オバ朗の親友にして良きライバル。

◆アス江

【地獄閻鬼・亜種】。地と雷を自在に操る。ミノ吉とは恋人同士。

◆スベ星

【煌魔星女王・亜種】。こと魔術の行使に関しては《戦に備えよ》随一。

◆ブラ星

【血剣軍女帝・亜種】。スベ星とは特別に仲が良い。

◆セイ治

【聖輝鬼王・亜種】。守りと癒しに優れ、ある種のカリスマ性を持つ。

◆アリ腐

【腐死鬼姫・新種】。あらゆるものを腐らせる力を持つ。

◆クギ芽

【九祇鬼姫・亜種】。情報収集能力にかけてはオバ朗以上。

【オバ朗の子供達】

◆オーロ

姉妹さん（姉）との間に生まれた、第一子の長女。【魔砲】を武器に戦う【半人武鬼・亜種】。

◆アルジェント

姉妹さん（妹）との間に生まれた、第二子の長男。槍と弓を得意とする【半人武鬼・亜種】。

◆鬼若

鍛冶師さんとの間に生まれた、第三子の次男。近接戦闘に優れた【獄卒暴鬼】で、ミノ吉を深く尊敬している。

◆ニコラ

錬金術師さんとの間に生まれた、第四子の次女。人間なのでまだ赤ん坊。

◆オブシー

赤髪ショートとの間に生まれた、第五子の三女。【使徒鬼・亜種】なので成長は早い、まだまだ幼児。

その他

◆飯勇

【聖戦】でオバ朗に負けた【料理の勇者】。料理の腕を見込まれ、自らの《副要人物》達と共にスカウトされた。

芸術的な観点で見ても中々の逸品だが、【光武王子】によると、門は魔法を完全反射する魔法金属【ルナティエルミスラー】をメインにした合金で造られているそうだ。なので魔法対策は万全な上、物理的にもかかなり頑丈らしい。

また魔法による鍵や罠を備えている事に加え、門の左右には完全武装した巨人騎士二名と巨人魔術師二名が守衛として控えている。

王城内部で働ける時点で巨人達の中でも選ばれた存在なのだが、財宝が眠るこの守りを任されるのはその中でも更に選りすぐられたエリート中のエリートであり、忠誠心と実力は本物だ。たとえ王族といえども、【巨人王】の許可が無い限り中には入れないという。

鼠一匹入る事も叶わないほど厳重に守られているそんな《第二宝物殿》の門は、しかし俺達の前でゆっくりと開かれていく。

【光武王子】から【巨人王】の許可書を手渡され、特別な手段でその真偽を確認した守衛が、特殊な操作をして開いたのだ。

ゆっくりと見えてくる宝物殿の内部には、巨人達の国が現在に至るまでの長い長い歴史の中で手に入れてきた、宝物の数々が貯蔵されていた。

【幻想】級や【伝説】級の国宝マジックアイテムが貯蔵される《第一宝物殿》と比べれば格は大きく劣るが、しかしそれでも見事な光景である。

石造りの巨大な部屋に並べられた武器や防具。それはまさに、巨人達が使用できるほどのサイズのマジックアイテムによる山脈だった。

きちんと分類ごとに整理されているそれらを、【道具上位鑑定】や【物品鑑定】を使い分けながら見たところ――

まるで炎を閉じ込めたように赤く輝きながら波打つ炎波大剣【焼き払う地平線】

極低温の冷気を発する白銀の穂先と、突風を巻き起こす槍飾りを備えた短槍【氷嵐の喚び槍】

禍々しい雷棘が打撃箇所にびっしりと生えた超重量の赤黒い大槌【雷血棘獣の大槌】

正方形の魔法金属の分厚い板が幾百と組み合わせっており、攻撃に合わせて形状変化するタワーシールド【変貌魔獣の積層殻】

生体素材由来の生々しさと艶やかな黒色甲殻の光沢を保ったまま、巨人職人がマラ・ボにより造り上げられた巨人鎧【黒硬重殻象蟲甲威胴具足】

魔法金属よりも硬く絹のように滑らかな巨獣【蒼天水虎】の毛皮から造られた、薄手ながらも堅牢な外套【流麗なる青き虎衣】

一振りで雲を生み、二振りで雨を降らし、三振りで雷を喚び、四振りで晴天をもたらす、純白の大扇【線理空鳳扇】

食材を載せて一度置むと、次に広げた時には調理された料理が現れるという大きなランチョン

マツト【料理人の食布】

所持者に害なす存在の接近を知らせる、丸い水晶と黄金で出来た【スタリナクの羅針盤】

魔力を籠める事で描かれた幻影巨狼を召喚できる、黒毛皮に狼の頭蓋骨を銀細工で表現した装幀の【幻影狼祭経典】

—— などがあった。

見た事も無いような品々がざっと数百点以上。巨人用だけあつてどれも巨大すぎて俺達が扱うには不便であるが、ここにあるマジックアイテムはどれをとつても目が飛び出るほど高額かつ有用なモノだろう。

他にも未知の魔法金属のインゴットや巨大な宝石など、一つ一つの大きさはもちろん、その質の高さには素直に驚かされる。

しかしこれほどの質の高さと貯蔵量の多さも、冷静に考えればある意味当然であつた。

ここ【神秘豊潤なる暗黒大陸】という特殊な【神代ダンジョン】で生活するとなると、強力なダンジョンモンスターとの戦闘は避けられない。

そして巨人王都《クロニユソス・ティタン》の巨大な生活圏を維持する為、巨人の兵士達が日々戦闘を繰り返している事は想像に難くない。

また食肉などを得る為に、一般市民の巨人達も戦闘をする必要がある。

加えて、他の勢力との争いなどもあるだろう。そうした諸々の戦闘が日々繰り返され、その過程でマジックアイテムを得る事になる。

また、最高レベルの【神代ダンジョン】なだけあつて、ダンジョンモンスター討伐や自然発生する宝箱などから得られるドロップアイテムも、高品質なモノばかり。

そうして得られたドロップアイテムは、王城以外にも幾つかある施設で有効活用される一方、その中から厳選された品が、献上品としてこの宝物殿に集められるのだ。

そうした事情が眼前の圧倒的な光景を形作っている訳だが、そんな中を俺達は物色していた。

何故なら、この中から百品が俺達の物になるのだから。当然、真剣そのものである。

というのも、昨日の【巨人王】との非公式会談で俺はとある依頼を受け、その見返りがこれなのだった。

依頼とは、《樹栄古都ティタンマギア》にて微睡む、全七体の【エリアレイドボス】が一体—— 古代絶界蛇龍霸王“ミルガルオルム”の討伐への協力だ。

初めは流石に驚いたが、話を聞くと納得できた。

もともと【巨人王】は、単独であつても“ミルガルオルム”に挑む予定だったらしい。

かつて行われた“ミルガルオルム”との戦いは、『万を超える巨人の軍勢が吞まれて消え、現代よりも強い【英勇】と【帝王】の多くが散った』と語り継がれている。そんな歴史を知る者からす

れば、【巨人王】の挑戦は、抗^{あらが}えない自然災害に挑むようなただの自殺行為に他ならないだろう。

しかし、【巨人王】は若い頃から【神秘豊潤なる暗黒大陸】を放浪して武者修行したというくらい、筋金入りの戦士である。

巨人の王族の一員なので、恵まれた体格と卓越^{たええつ}した戦闘技術を持ち、多くの強者と戦い勝利してきた。

そして若さゆえの愚かさで何体かの【エリアレイドボス】に挑み、その度に瀕死^{ひんし}の重傷を負いながらも逃走するという事を繰り返したという。

【エリアレイドボス】との戦いで負った重傷の痕^{あと}は今も身体に残り、それに触れながら当時を思い出すように語る【巨人王】の姿が印象深かった。

ともあれ、そんな【巨人王】が、巨人族にとつて最も因縁深い「ミルガルオルム」に挑まないはずは無い。実はこれまでもヒツソリと挑み、良いところまでいくが最終的には敗れてなんとか生き延びてきた、とは本人談。

傍に控えていた執事らしき老巨人はそれを聞いて何も語らなかったが、遠い目をして溜息^{ためいき}をつく姿は何より雄弁^{ゆうべん}だった。

それはさて置き、鍛えて、【エリアレイドボス】に挑んで、負け続けるという戦いの日々明け暮れて時は過ぎ、この【巨人王】は先代から正式に王位を受け継いだ。

そうした立場に加えて、愛する三人の妻と可愛い子供達が出来た事で、流石に軽率な行動はしにくくなったらしい。そこからは自身と子供達を鍛えながらも、政治に力を注ぐ日々を過ごしたという。

それはそれで楽しかったが、長兄であり王太子である【光武王子】は、立派に後を任せられるほど成長してくれた。

また万が一【光武王子】に何かがあっても、その後に【闇法王女】などもある。

政治面で重要な問題は自分で解決したし、信頼できる大臣や家臣、そして教育に力を入れてきた事で若手も育った。

問題は次々と出てきて完全に無くなる事はないが、それは次の世代が解決していく試練である。となれば、これから先ただ老いて戦えなくなつて死ぬよりも、どうせなら血湧き肉躍^{にくもど}る戦いで果てる方がよい。

だから、【巨人王】はかつて祖先が為した偉業に挑むべく、因縁の相手である「ミルガルオルム」を討伐する事にした。

今回は死んでも構わない。死力を尽くして挑む。

そういった事を考えていた時、【光武王子】を通じて俺の存在を知り、それと同時に【神託】が下された。自身の【加護神】の石柱である【巨人の神】から、俺の助力を得ろ、と告げられたのだ

という。

【巨人王】も別に、あえて死にたい訳ではない。

力及ばずに果てるのなら仕方ないと受け入れるが、勝利できる道があるならば迷わずそちらを選択する、即断即決な性格らしい。

しかし本当に俺にそれだけの強さがあるか分からない為、非公式の会合をセッティングし、直接会って見極めた結果、これなら間違いないとして依頼した、と。

俺としても悪い話ではない。

巨大な【巨人王】は、巨大すぎる“ミルガルオルム”との戦いで間違いなく大きな役割を果たすだろう。

また俺達が行われる報酬は、前払いで《第二宝物殿》にある財宝を百品貰える事に加え、成功報酬で“ミルガルオルム”のドロップアイテムを山分けという話だった。

【巨人王】としては、ドロップアイテムも欲しいが、祖先と同じ偉業をしたという名誉の方が大きいらしい。だから俺達の名前が討伐者として大々的に表に出る事はないが、こっちとしては別にここでの名誉などどうでもいいので気にならない。

成功報酬となるドロップアイテムがどの程度の品になるかは未知数ながら、参考として過去の討伐時の情報を教えてもらったところ、半分であっても満足できる内容になりそうだった。

それに、仮に失敗しても、前払いの百品だけで十分すぎる利益が出る。

という事で、俺達は【巨人王】の依頼を受けた訳である。

まあ、条件的にはほぼ対等なので、雇い主と雇われ人と言うよりかは、同盟相手と思えばいいだろうか。

話し合いの結果、決戦は数日後という事になり、それまでに前払い品の選別をはじめ色々と準備を進めておく。

暗黒大陸に来てまだそれほど日は経っていないが、中々、楽しい事になりそうだ。

《七十二日目》

朝から、【光武王子】の案内で王城内の一室に移動する。

そこは元々あまり使われていない空き部屋ながら、王城内にあるだけあって毎日清掃されていたし、それなりの質の調度品が置かれていた。

しかしその調度品が今回は邪魔になるので、事前に撤去を頼んでおり、それが完了したのでこうして案内してもらっているのである。

到着した空き部屋は、巨人からしてもそれなりの広さがあるらしく、端から端がとても遠い。大広間に人形を置いたような光景、とでも言えば少しは伝わるだろうか。

そんな伽藍がらんとした部屋で何をするかというと、以前仲間とした巨人の名工ラングド・グカ製の特
別なゴーレムルベウシス・スジャ“統べる紅玉の王”——通称ベニタマによるゴーレム整備と改造を行うのだ。

俺は早速、【異空間収納能力アイキョウコンナウキョウ】から無数の製造用ゴーレムや加工・整備器具用の大道具、そして
予備分も含めて二十体の巨人型戦魔兵“ギガンテスゴーレム・ナイトロード”を取り出していく。
繰り返しになるが、今回の目標“ミルガルオルム”はとにかく巨大である。

それと戦うには、やはりどうしてもこちらも最低限の大きさを確保する必要があった。
大きさは強さに直結する。

技術も何も無くとも、山のように巨大な赤子が暴れたら、普通の人間は抵抗もできずに踏み潰さ
れてしまう。そのように、体格差は技術の差など簡単に覆ってしまう重要な要素だ。

そして“ミルガルオルム”はただ大きいだけではない。

何重にも重なる強固な鱗うろこに、鋭利で巨大な毒牙を持つ。全身が筋肉の塊かたまりなので見かけとは裏腹
に動きは俊敏で、更には豊富な魔力により絶えず強力な魔法飽和攻撃を行使してくるという。

圧倒的すぎる体格にそんなものが加わればどうなるかは、普通に考えれば明らかだろう。

俺自身は色々と対抗手段があるし、勝算も十分すぎるほどにある。

しかし俺以外のメンバーはとなると、ミノ吉きちくんとアス江えちゃんと、それからギリギリでカナ美
ちゃんが参戦できる程度だ。

それ以外のメンバーが生身で挑むのは自殺でしかない。多分、まともに戦えば数秒で殺されるだ
ろう。

しかし、危険ではあるが、これほどの強敵と戦う機会を子供達にも与えてやりたいというのが親
心だ。

そこで用意する事にしたのがゴーレムだった。

以前捕獲したモノを、胴体部にコクピットを増設するなど改造して使用すれば、生身と比べて遥
かに安全だ。

その上での援護射撃程度なら、子供達以外に赤髪あかがみショート、そして本来なら非戦闘員である鍛治かじ
師さんや姉妹さん達すら参戦可能になる。

遠くから照準を合わせ、トリガーを引くだけの簡単作業である。しかもゴーレムが補助してくれ
るので、何も難しい事はない。

“ミルガルオルム”との戦闘に参加し、討伐した時に得られる経験値は、鍛冶師さん達に何をもた
らすのだろう。

新しい【職業ジョブ】を得るのか、または何か別の結果として発現するのか。それを知りたいという純
粋な好奇心は確かにあるが、そうでなくても得た経験は必ず役立つ。

今後を思えば、この好機を逃すのはあまりにも惜しいのだ。

とはいえ、安全策は何重にも構築する必要がある。

肉盾として【生成】した巨人を配置するのは当然として、彼女らが搭乗するゴーレムそのものの向上も必須だ。

それには経験や技術が必要になるが、幸いな事にその課題はベニタマが解決してくれる。

人が搭乗するコクピットや操作系統の再構築をはじめ、激しい運動をした際に内部の人間が受ける衝撃を吸収する機能の追加など、改造は多岐に及んだ。

幸い、大きな困難はなかった。

俺の前世は似たような機械で溢れていたし、実際に乗った事だつて何度もあった。その情報や経験則に加え、この世界の魔法やら素材やらによる改良を次々追加していく。

大雑把にでも概念を伝えれば、ベニタマが最適化して実現してくれる事も大きい。無数のゴーレム達が忙しなく活動するうちに、あつという間に時間が過ぎていく。

こういったモノは色々と使えるので、今後も継続していこうと思うのだった。

《七十三日目》

ゴーレム改造は昨日から一瞬たりとも休む事なく続き、今日が終わった時点で、予定していた工程の八割が終了した。

今回、基本的な運用は遠距離からの援護になるので、最初ほどの機体も遠距離攻撃能力を重視するつもりだった。

だが、個々人の戦法や性格的な理由で、赤髪ショートと第三子の鬼若からは遠距離戦よりも接近戦重視の仕様がいいと言われた。また、それに合わせて、第一子のオーロ、第二子のアルジェントなどの機体の仕様も変更する事になった。

その為、今後の量産性なども見据えて、まず「ギガンテスゴーレム・ナイトロード」を各種運用目的ごとに幾つかのシリーズ別で改造していった。

その後、それぞれ搭乗者に合わせた細かいカスタマイズが施された。

そうして着々と準備が整っていくのを見ながら、俺は決戦に備え、事前に狩っていた巨獣や巨蟲の料理を食べ続けた。

王城に勤める老巨人の料理長が、豪快に料理包丁を振るってせっせと料理を作る傍らで、それを見ながら飯勇達がアレンジも加えつつ料理を作る。

巨人用の量で休む事なく造られる料理と、それを人並みの量にしつつアレンジも加えた料理。それらをバクバク食べるのだ。

“リングウーハ”という料理がある。

ミンチにした数種類の巨獣のもも肉を平たく固めて焼き、そこに“天領玉葱^{てんりょうたまねぎ}”や“地沈トマト^{アーム}”といった新鮮な野菜と、食欲をそそる芳醇^{ほうじゅん}な香りを引き出す“宝果樹^{ジェムリアーカ}”の実の搾り汁を加えた料理だ。

見た目は好み焼きのように平べったいハンバーグに似ているだろうか。

箸を入れると、豆腐のように柔らかく、肉汁が溢れるように出てくる。

フワツと香る肉汁の匂いは食欲を刺激して止まず、思わず口に運べば、今度は肉汁の濃厚な旨味が舌を支配する。

肉の柔らかさと野菜のシャキツとした食感、ほのかな甘味と酸味の調和。

巨獣のもも肉は赤身が多く、どちらかと言えば焼くと硬くなりやすいのだが、まるで溶けるように口の中で解^{ほど}けていく。

豊かな自然と濃密な魔力によって育^{はぐ}まれた野菜は栄養満点で、それ単体でも美味^{おい}しいのに、肉との融合で更に深い味となっていた。

“ジュゴラス”という料理がある。

鉄串に牛系や鳥系の巨獣の肉を刺し、キラキラと光る“金砂塩^{ゴルトサンド}”を振り、炭火でじつくりと焼いただけの単純な料理だ。

しかし希少部位の肉を惜しげもなく使い、更に旨味成分の塊のような“金砂塩”で味付けされているからか、ひと口噛めばついホフリと溜息が出る。

表面はカリツと、中は柔らかいこれは、ただ単純に美味^{うま}い肉料理である。

片手に持って大きく口を開けて肉に噛みつき、残る片手で酒を飲む。

ああ、最高の組み合わせである。

“バロト・レレ”という料理がある。

これはゲテモノ料理の一種で、孵化^{ふか}寸前の鳥系巨獣の卵——人間の成人男性くらいの大きさがある——をジックリと茹^ゆで、嘴^{くちばし}や羽根がほとんど出来上がっている中身の雛^{ひな}を食べるというものだ。

見た目はともかく、単なる滋養強壮だけでなく、体内魔力の活性化などの効果があるらしい。

中でも最も貴重なのが不死鳥の卵を使った“フェニ・バロト・レレ”と呼ばれるモノで、それを食べると一定期間の不死性を得られるという。話によれば、不治の病すら治り、四肢欠損はもちろん、半身分断や頭部粉砕などの致命的な損傷すら高速再生するそうだ。

ちよつとそれ食べてみたい、なんて事を思いつつ、卵の中の独特な臭いのスープを啜^{すす}り、コチラを見つめてくる雛の白目を見つめながらバリバリと頭から食べた。

今回使った卵は、嵐呼ぶ大鷲^{おおむし}【ビガンテクスル・フェーグス】の卵だったのだが、個人的には美

味いと思う。ただ見た目が見た目なので、隣に座る赤髪ショート達が嫌な顔をしていたのも仕方ないだろう。

その他にも、巨魚を使った魚料理や、巨蟲を使った蟲料理などを食べ続けた。

決戦の日までに行えるだけ食べて食べて食べ尽くして、全てを血肉に変える必要があるのだから、もつともっと食べねばなるまい。

なんて言い訳をしながら美食を堪能した一日だった。

《七十四日目》

今回の“ミルガルオルム”戦には俺達はもちろん、鍛冶師さん達など本来なら非戦闘要員であるメンバーも参加予定となっている。

本人達も了承済みであり、真摯な瞳で『守ってくれるんでしょ?』と言われるまでもなく、俺としても全力で守るつもりだ。

ともあれ、鍛冶師さん達が参加する絶対条件でもある、各メンバー専用のゴーレムが今朝完成した。

即席の作業場として用意してもらった部屋には、“ギガンテスゴーレム・ナイトロード”を改造した鬼面剛体のパラバラムゴーレム“ギガトロール”シリーズが腰掛けるようなポーズで整然と並ん

でいた。

騎士のような外見のナイトロードと異なり、ギガトロールシリーズは基本的に分厚い筋肉の鎧を備えた鬼のような外見をしている。

鋭い角を備え、赤い義眼で敵を睨み、太く大きい巨体が周囲を威圧する。身の丈は、ナイトロードが三十メートル級だったのに対し、骨格や装甲などを見直した事で四十メートル級にまで巨大化している。

ナイトロードよりも太く大きく重いので、一見すると鈍重そうにも思える。しかし、設計を見直し、より良い素材を使用した事で、全体的な性能は三十パーセント以上も向上していた。重量が増えてもナイトロードより速いし俊敏だし、あらゆる面で上回っている。

そんなギガトロール達は、装甲強化に使った魔法金属の黒銀色に輝き、搭乗者の意見を取り入れたカラーリングを施している。

またカラーリングによる差以外にも、運用コンセプトや兵装、その他諸事情により、幾つかの機種に区分される。

一番数が多く、丸みを帯びてズングリムックリした形のいかにも量産機のようなのが、“ギガトロール・アルテ”。これは、参加したという事実の為にのみ参加させ、序盤の遠距離攻撃しか担当させる気の無い鍛冶師さん達の機体である。

基本的に遠距離砲撃しかしないので、一撃の火力を高め、生存確率を上げる為に装甲を強化、更に背面からコクピットを射出する緊急脱出装置を組み込んだ事で、かなり太めの外見になった。

武器は《第二宝物殿》で得た、魔力を籠めると三種類の魔弾を発射する魔杖砲【クシュペリアの砲杖^{キャシクロッド}】だけ。指輪や護符などの防御系マジックアイテムを複数持たせて、守りに特化させた。

その大きさとマジックアイテムの効果によって戦闘能力は高いが、搭乗者の技量や機動性の低さからして、近接戦はできないと思った方がいい。

ただ、錬金術師さんだけは第四子のニコラと一緒に搭乗するので、ニコラの幼いながらも豊富な魔力を活用すべく、魔力を消費して自己を強化できるマジックアイテムを持たせている。それにより、ギガトロール・アルテの中では錬金術師さんの機体が最も攻撃力がある。

それからオーロやアルジェント、オブシーといった子供らや飯勇達の乗るバランス重視の機体がギガトロール・ゾルダ^ダ。ある程度装甲を減らして機動力を上げるなど対応力を高め、どんな環境でも同じような性能を引き出せるようにした。

武装はギガトロール・アルテと同じく【クシュペリアの砲杖】に加え、近接戦もできるように巨剣や巨槍、または敵の攻撃を弾き受け流す大盾も装備している。

また追加武装として、薄緑色の【風纏^{エフトリ}の飛び衣^{フビイ}】という巨人族のマントを羽織^{はおり}る。これは一時的に跳躍力を高め、短時間なら空も飛べるというマジックアイテムだ。これの影響で、鬼の騎士のよ

うに見えなくもない外見となった。

特に癖^{くせ}も無く、武装次第で全距離に対応できるので、今後主力機になるだろうと思われる。

赤髪ショートと鬼若の機体は、近接特化型となる“ギガトロール・エゲド”だ。

ギガトロール・アルテでは遠距離攻撃に費やしていた分を、最大出力や機動性、装甲強化などに振り分けている。

遠距離攻撃はほとんどできない代わりに最も力が強く、また速くて硬い。近中距離まではどうにかなので、搭乗者を選ぶものの、前衛として十分な性能を確保できている。

ただ、赤髪ショートのギガトロール・エゲドは本人の強い希望があり、かなり獣じみた形状に変化していた。

敵に喰らいつく狼を思わせる頭部に、前傾姿勢の曲がった背中。速度と柔軟性を求め、金属装甲よりも軽くしなやかな巨獣の毛皮を多用した外装。脚部は速度を求めた肉食獣のような逆関節で、やや長い両手に長方形で肉厚の双剣【巨人兵長の骨肉断刀^{リッパナル・アーガ}】を装備しているが、四足歩行もできるように可変式の鉤爪を手首に追加した。

まるで巨獣と巨鬼が融合したような姿であり、獰猛^{じようき}な獣鬼士^し、とても表現すればいいか。

明らかに赤髪ショートのだけ別物なので、“ギガトロール・ベルク”としてまた別の新しいコンセプトの機種に分類するでしょう。

当初の予定とは大きく異なる部分もあったが、とにかく完成したのなら試運転が必要だ。
細かいメンテナンスや不具合を洗い出す為、皆を呼んで早速取り掛かる。
王城内にある訓練場にて、ギガトロール達は一日中動き続ける事となった。

《七十五日目》

ギガトロールの操作は極めてシンプルである。

まず胸部にあるコクピットに乗ると、スライムに似た擬似生体素材製の特殊な保護器具で全身を隙間無く包まれ、衝撃などから守られるようになる。

保護器具も含め、コクピット内には精神感應系の魔法金属が使用されている為、操作には専門的な技術も知識も不要で、搭乗者は自分の身体を動かすような感覚で機体を意のままに動かせる。

ちなみに、何を触ったか分かる程度の触覚はあるが痛覚は無いので、壊されるのも怖くないし、極度に熱いモノでも冷たいモノでも問題なく扱える便利仕様だ。

搭乗して行う訓練も、生身との違いを埋める為のようなものであり、個人差は存在したが、数時間あれば皆どうにか慣れる事ができた。

実際に動かして感覚を養えば、内部構造を詳しく知らなくても動かせるという意味で、車を運転する感じに近いだろうか。しかもギガトロールは自分の身体のように感じられるのだから、理解する

のはより簡単だ。戦闘に慣れない鍛冶師さん達でもそうだったので、誰でも似たような結果になるだろう。

ともかく、かなり操作を簡略化しているので動作に問題はないはずだが、いざという時にコケないう、ギガトロールに搭乗した鍛冶師さん達は王城内の訓練場をひたすら歩き、時には走る。そしてひたすら照準を合わせて撃つ、合わせては撃つという訓練を繰り返した。

それだけに集中し、移動砲台としての役割なら何ら問題なくこなせる程度になつてもらった。ちなみに鍛冶師さん達のギガトロールには、安全の為に俺の分体を仕込んであるので、照準は自動で合う。

一方の赤髪ショート達は、ほとんど生身の時と同じように動かせる段階に達した。普段から戦い慣れているだけはある。

ただ、可動域の違いなどがあるので、その辺りを調整すべく、今日は巨獣狩りに出かけていた。

【光武王子】達に付き添ってもらったので、機体は破損なく帰ってくるだろうとは思いつつ、いざという時はすぐ整備できる用意をしておいた。

まあ、杞憂^{きゆう}に終わったのだが。

さて、急な話だったが準備は大体整った。

今夜は英気を養う宴会を楽しむのみ。そして明日最終的な打ち合わせを終えたら、明後日には楽

しい楽しい蛇狩りである。

《七十六日目》

明日、俺達は“ミルガルオルム”に挑む。今日は早朝から夕方まで、皆のギガトロル習熟訓練に付き合った。

それから整備点検を行った後、夜は【巨人王】が用意してくれた決起宴会に向かう。決起宴会が行われる食堂は、どうやら普段から王族が集まって食事をする場所らしい。

天井は巨人達の歴史と思われる戦を描いた壁画で彩られていて、シャンデリアと言うには余りにも巨大なマジックアイテムが優しい太陽のように光り輝く。

壁には視線を引き寄せる魅惑的な絵画や調度品が飾られ、そしてその一部であるかのように巨人メイドや執事が気配を薄めて控えていた。

そして部屋中央に置かれた円卓には、出来立ての料理が並ぶ。

俺達が案内された席の正面には、【巨人王】が座っている。【巨人王】の左右には王妃らしき三名の貴婦人が、更にその横に【光武王子】や【闇法王女】と、二人の弟妹らしき子供巨人が四名腰掛けていた。

それに加えて、俺達の周りの席には、精悍な顔に傷を持つ筋骨隆々な中年の巨人將軍や、立派な

髭を生やす年老いた巨人宰相、黒紫色のローブを纏った中年女性の巨人魔術師長までいる。

どうやら俺達との顔合わせも兼ねて、重鎮を招いたらしい。

分体による情報収集で、食堂にいた全員の顔や大まかな性格などは把握していたが、実際に顔を合わせるのは初めてだ。

子供達は俺達に対して純粋な好奇心を持つか、あるいは無関心かだが、大人組は違う。好奇心、不快感、不快感、困惑、苛立ち、その他様々な感情が滲む眼でこちらを見つめていた。

何故そうなっているのか、すぐには分からなかったが、ともあれ決起宴会は始まった。

用意された料理を食べ、大いに飲む。とにかく量が多く、鍛冶師さん達はすぐにお腹が膨らんだらしいが、ミノ吉くんや俺などはバリバリ食べて飲み続ける。

【巨人王】が特別に用意させたというだけあって、どれもとにかく美味かった。

ただ、飲み食いだけに集中できる場でもない。

ミノ吉くん達は我関せずで飲み食い続けるが、俺は客側の代表として【巨人王】や王妃などと話をせねばならなかったのだ。

その中で、ようやく大人組が様々な感情を抱いている理由が分かった。

どうやら【巨人王】が“ミルガルオルム”に挑む事は、王妃達も巨人將軍も巨人宰相も巨人魔術師長も、完全に了承している訳ではないらしい。

王妃達は、ただ【巨人王】の身を案じて不安を抱いており、自分達からすれば虫か妖精のような大きさの俺達に騙されてはいないのかと警戒している。

巨人將軍は、そんな大物に挑むのならば余所者——俺達の事だ——ではなく、自分と部下を選んでくれればいいのにと憤っている。

巨人宰相は、【巨人王】を止める事はできないと理解し、本当に討伐できたのならば今後色々と有益なのは認めつつ、それが可能なのか疑っている。

巨人魔術師長は、【巨人王】が認めたという俺達を観察し、その本質を探る研究者の眼で見ている。

他にも理由はあるだろうが、大体その辺りらしい。

まあ、それはどうでもいい事だ。

何を考えていようと、こちらとしては【巨人王】との約束通りに事を進めるだけである。

とりあえず忌避感や嫌悪感だけは持たれないように気をつけたが、やはり巨人將軍は武人らしく力で白黒ハッキリさせたいようで、勝負を挑まれた。

巨人將軍の大きさは、【巨人王】達王族に迫る九十メートル級。

公爵家のような立場となる名門の長であり、王族の血も混ざっているそうなので、体格以外の能力も軒並み高い。

【巨人王】よりも少し若く、昔から【巨人王】を目標としてきただけに忠誠心が強いが、頑固なのが玉に瑕らしい。巨人種こそ至高という思想の持ち主でもあるので、敬愛する【巨人王】と俺が、肩を並べるのが我慢ならなかったようだ。

それはともかく、余興としては悪くない。

実力を示せば今後の活動がしやすくなるのだから、挑戦を受け入れる事にする。

戦う場所は、食堂と隣接している広い庭を使う事になった。

庭には様々な種類の花が植えられ、美しく咲き誇っていた。本来なら季節ごとに変わる花を見ながら食事でもするのであるうその場所で、俺と巨人將軍は対峙する。

身長二メートルほどの俺と巨人將軍では、比べるのも馬鹿らしくなる圧倒的な体格差がある。通常なら、勝負は人間が地を這う虫を踏み潰すようなものだろう。

しかし、実際は当然違う。

最初、向こうの攻撃はやはり踏み付けばかりだったので、俺は地を這う黒い魔蟲的な気持ちで動き回って回避していた。しかしそれでは、観客からすると巨人將軍が何だか不格好だろうと思いき、戦いやすいように空を飛び、拳や蹴りをヒラヒラと避ける。

こうも巨大だと遠近感が狂い、ゆっくり動いているように見えるが、巨人將軍の攻撃は全て速かった。

だが俺を捕らえるほどではなく、ある程度時間が経ったところで、怒りからか赤らんでいた巨人將軍の右頬を思いつきり殴る。

その際は、普段よりも手加減をしなかった。大きさに相応の耐久力がある巨人將軍相手には、普段通りだと効き目が薄いと思ったからだ。

そして殴打した瞬間、肉が潰れ骨が砕ける音がした。それも、骨が大きかったからか、爆発したかのような大音量である。

巨人將軍の巨体は高速回転しながら浮き上がり、少し勢いを落とした後、顔面から地面に沈んだ。白目を剥いた顔は頬骨が砕けて歪み、口からは流血と共に巨大な歯の破片が零れ出る。

とりあえず確認してみると、気絶しているだけだった。

さっさと治療した方がいいだろうと、近くに控えていた執事やメイドを呼ぶと、慌てて駆け寄ってきた。

しかし、巨人將軍が大きすぎて運ぶのに苦労していた。鎧こそ着ていないが、大きさが大きさに相応の重量があるから、それも当然だろう。

必死に動かそうとする姿が何だか不憫だったので、【森羅万象】^{オールドネイチャー}を用いて宙に浮かして運んでやる。驚かれたが、この程度の反応は慣れている。

ともあれ、そういう一幕があったからか、王妃達の態度は軟化した。

何だかんだで、実力主義の文化はこういう時に便利である。力が無いと虐げられる事もままあるが、逆に力があれば大抵は何とかなるので楽だ。

その後は【巨人王】と酒を酌み交わした。

お互い酒豪だからか巨獣料理を肴に今まで飲んだ酒の話で盛り上がり、有意義な時間だったと言えよう。

余談ながら、酒の海で泳ぎながら飲んだりもした。

何度もやるのは気が引けるものの、偶にはこういう飲み方も悪くはないなあ。

《七十七日目》

早朝、昨日の酒は既に抜けている。

他の皆も酒の影響はほとんど無く、太陽が昇る前から準備を進め、既に出発準備は出来ていた。

今回の戦闘に参加するメンバーは、俺達全員と【巨人王】である。

【エリアレイドボス】である古代絶界蛇龍霸王「ミルガルオルム」に挑むには余りにも少ないが、【巨人王】が他の巨人は足手まといになると言って参戦を拒否したので仕方ない。

また、本当なら鍛冶師さん達など普段は非戦闘員であるメンバーは連れていくべきではないとも言われ、まあそうだろうなとは思ったが、援護だけだからという事で了承してもらっている。

ただ、見届け役として、【光武王子】や【闇法王女】とその護衛の巨人百五十名が一緒に出立する事になっている。

総数百五十二名の彼らは、『樹栄古都ティタンマギア』の外縁から成り行きを見守る事だけに徹し、仮に俺達が死んでも手出しはしない予定だ。

王妃達が妥協案として提案し、【巨人王】が受け入れたこの集団は、戦闘には参加しない条件にもかかわらず緊張感で満ちている。戦闘の余波だけでも危険だと予測される事に加え、何より歴史的に因縁深い強敵のところに outward のことから、当然の反応だろう。

まあ、実は王妃達からの密命で、何かあれば命がけで俺達を救助する為の部隊なのだろうから、その辺りから来る緊張感もあるはずだ。

どちらかというと、ギガトロールに対して興味津々で緊張感の欠片かけらも無い【巨人王】の方がおかしいくらいである。

何にせよ、予定通りに状況は進む。

道中、習熟も兼ねて、襲い掛かってくる巨獣や巨蟲などのダンジョンモンスターを赤髪ショート
のギガトロールが先頭に立って流れるように討伐し、素材も有難く回収しておく。そうして昼前には『樹栄古都ティタンマギア』に到着した。

飯勇達や巨人宮廷料理人達が作ってくれていた弁当を【異空間収納能力】から取り出して食べた

後、断崖絶壁を下りて都市の中に入り、巨石畳きよせきたたみの道を進んでいく。

視線の先には目的地である王城があり、その王城に巻き付く深緑色の壁のようなそれは、近づくとつれてより迫力を増していく。

古代絶界蛇龍霸王「ミルガルオルム」。

圧倒的な巨大さを誇る【エアレイドボス】。

ただそこに存在しているだけで発せられる途轍もない重圧。鍛冶師さん達はそれに負けそうになつていたが、事前に精神力を強くするマジックアイテムを装備していた事に加え、イヤーカーフス
経由で耳元で励ます事でどうにか堪えた。

それでも、重圧が心身に影響を与えるので足元がフラフラして心許ない。なので、【下位巨人生成】と【真竜精製】の重複発動にて生み出した、大盾を持つ竜頭の黒い巨人 黒王守護巨竜人ブラックガードイアンドラキガス達に支えられながら移動していった。

「黒王守護巨竜人」は、竜鱗や竜殻で造られたような大盾を装備した、黒い鱗を持つ巨大な竜人ドラゴンであり、とにかく守備に特化している。

それが合計十体。肉の盾として特殊な能力を発揮する陣形を組ませつつ移動し、鍛冶師さん達が乗る遠距離型のギガトロール・アルテは、射程ギリギリの位置で【クシュペリアの砲杖】を構えた。魔力を籠めると三種類の魔弾を発射できる能力を持つ【クシュペリアの砲杖】だが、その中の一

つに遠距離狙撃魔弾というのがある。

この弾は魔力のチャージに少し時間がかかり、六発撃つとまたチャージが必要になるが、その分射程が長いし威力もある。

鍛冶師さん達の役割は、俺達が最初の一撃を叩き込んだ後、その傷口に遠距離狙撃魔弾を六発全弾撃ち込み、その後は退避するだけ。

これ以上の役割は重すぎる。やつてもらうのに精一杯のラインである。

緊張する鍛冶師さん達が俺達と離れて持ち場に行くのを見守った後、俺は赤髪ショートと子供達にも注意を飛ばした。

即死だけではない事、無理は絶対にしない事、援護に徹する事、といった内容だ。今回のボスを相手するには実力に不安の残る彼女らは、あくまでも援護としての参加であって、無理されては困るのだ。

そして戦闘の要^{かぎめ}として前線に立つのは、そんな赤髪ショートらを除いた俺達大人組と、【巨人王】である。

誰も死ぬなどだけ厳命した俺は、カナ美ちゃんと共に空を飛んで【巨人王】の傍らで滞空し、ミノ吉くとアス江ちゃんの準備を見守った。

ミノ吉くとアス江ちゃんは、身長が俺の倍以上に大きい。

しかし巨人種からすれば小さく、ギガトロール達よりもまだ小さい。

二鬼が幾ら強いとはいえ、そのサイズの「ミルガルオルム」と戦うにはやや不足しているように感じられるかもしれない。

だが、二鬼は【神秘豊潤なる暗黒大陸】で暮らす巨人達の存在を知り、どうすればいいのかを考えた結果、新しい技を身に付けていた。

そう、【合体^{ユニオン}】だ。

いや、パツと聞いても意味が分からないのは当然である。健全な者なら、男女で合体と言えば下ネタの方に思考が巡るかもしれない。

しかし二鬼の場合は、巨大な敵に対してどう戦えばいいのかを真面目に考え、どういう思考過程があったのかは分からないながらも、この答えに到ったのである。

俺も話を聞いてただけで、この時初めて実際に見る事になり、そして驚愕した。

まず、仁王立ちするミノ吉くんの肩に、アス江ちゃんが乗る。肩車^{かたなま}である。

その何処^{どこ}が【合体】なのかと思ったが、すぐに大きな変化が起こった。

肩車する二鬼から目も眩^{くら}むような雷光^{らいこう}が迸^{ほとけし}る。

途端に周囲の地面が大きく隆起し、それに合わせて家屋はひっくり返るように倒壊し、まるで世界を燃やすような勢いで白炎が巻き上がる。

変化はミノ吉くん達を中心に発生し、大地の流動はあつという間だった。

アス江ちゃんのお作する大地が圧縮変換されて金属の骨格となり、流動して伸び縮みする擬似剛筋となり、雷獄結晶が皮膚や毛皮のように全身を覆う。

ミノ吉くんの黄金雷が全身に張り巡らされた結晶神経を駆け巡り、白炎が擬似剛筋を動かす原動力となり、雷獄結晶に過剰に流された雷炎が更なる力と色を加える。

【合体】する前、ミノ吉くん達は言っていた。

この形態は、愛鬼合体【斧鎚蚩尤】。

【遺跡の陥墓塔】で拾った古文書に記載されていた、とある巨大なモンスターを基にしたと。

——【斧鎚蚩尤】は巨大で異形な鬼だった。

頭部はミノ吉くんのように牛に似て、胸部はアス江ちゃんのように豊満。

肩甲骨の辺りから二本追加で生えた合計四本の太い腕。その手には二鬼の力を含んで超高压縮されたらしき雷獄結晶製の重厚な巨盾と、太陽のような熱を秘めた巨斧、大地を叩き潰しそうな巨鎚大地を穿ちそうな巨鶴嘴が握られている。

背中は棘にも似た赤黒い雷獄結晶製の毛で覆われ、下半身は人間の足に蹄が加わったような造形だ。

ミノ吉くんとアス江ちゃんの特徴が混ざり合ったような外見となったこの【斧鎚蚩尤】状態では、

二鬼の能力が互いを損なう事なく上昇していた。

身の丈は【巨人王】とほぼ互角。流星にこれには驚いたのか、【巨人王】も啞然として口を開けていた。

もちろん、俺やカナ美ちゃん達でもある。

いや、予想できるかこんなもん。パラベランジャーの五鬼がここにいれば、狂喜乱舞していたかもしれない、戦隊モノに巨大ロボットは欠かせないからな、なんて思う。

ともあれ、何とか気を取り直す。

ここまでの変化があれば、寝ていた『ミルガルオルム』も流星に反応するらしい。

巨大な顔をもたげ、こちらを見ている。巨大な舌がチロチロと動き、獲物と判断したのか、俺達の様子を観察している。

戦いは既に始まっている。

となれば、先制攻撃される前に先制攻撃した方がいいだろう。

という事で、俺はあらかじめ用意していた終焉系統第十階梯魔術『終焉門・飢餓』を発動した。倦怠感すら覚えるほど、身体からゴツソリと魔力が抜け出し、それは現れる。

『ミルガルオルム』の上空、そこに開く巨大な黒い孔。

まるで世界がそこで終わっているような空間から、地上へと黒い光が降り注ぐ。それは触れたモ

ノを喰らう光だ。

光速で放たれた攻撃を回避できるはずもなく、降り注ぐ黒い光は“ミルガルオルム”の肉体表面を見る見るうちに勢いで貪り喰らい、その力を俺に還元する。

普通なら一瞬で効果範囲内の全てを殺す威力があるものの、“ミルガルオルム”が巨大すぎるせいで身体全体は捉えきれなかった。それでも、十分な範囲の肉体を大きく削る事ができた。

明確な痛撃により“ミルガルオルム”から発せられた、空間が裂けるような絶叫すら心地よく思える。それほどの美味に酔いそうになりながら、蛇狩りは始まりを告げた。

《七十八日目》

初撃で放った“終焉門・飢餓”によって、“ミルガルオルム”が巻き付いていた王城は崩壊し、光を浴びた竜鱗や竜殻はボロボロと崩れ、その下の肉までが抉られる。

そこに鍛冶師さん達の狙撃が叩き込まれたが、ダメージ自体はあるものの筋肉の鎧に阻まれて期待したほどの効果を発揮しない。

巨人が扱うマジックアイテムだけに威力は大きく、そこらの城壁なら撃ち抜けそうな威力があったものの、分厚い筋肉の鎧には痛打にならないらしい。

チャージした分だけ撃ち込ませた後、予定通り鍛冶師さん達は急いで後退させた。

それが正しい判断だったと実感したのは、すぐ後の事である。

赤髪ショートや子供達は注意を引きすぎないように注意しながら、手近にある“ミルガルオルム”の身体を攻撃して傷口を抉り、血を流させてダメージを蓄積していく。

しかし身体全体に対してごく一部なので、これも大きなダメージを負わせたとはいえなかった。

また、尋常でない再生能力によって傷つけた直後から治っていくので、それを上回る為には攻撃箇所を集中させる必要があった。

そして飯勇が解体する要領で弱点を見出してくれたので、闇雲に攻撃するより遥かに効率は良かっただろう。彼女らの攻撃が大きな役割を担ったとは言えないが、それでも役には立っていた。

カナ美ちゃんは、巨体の一部を魔水で氷漬けにする事で細胞を壊死させて再生を阻害したり、無数の魔水の茨で拘束したりしつつ、力に満ちた血を吸う事で自身の強化なども並行している。

カナ美ちゃんの魔水は物質を瞬間的に凍らせるだけの力がある。そして変温動物である蛇は温度変化に弱い。“ミルガルオルム”にもそれが当てはまるかは不明だが、とにかく相性は良かったのか、確実に動きを鈍らせ、ダメージを与えていた。

【斧鎚蚩尤】となったミノ古くん達は、普段通り前衛となって戦っている。

巨盾を使ってあらゆる攻撃を防ぎ、巨斧で叩き切る。ついでに巨鎚で叩き潰し、巨鶴嘴で肉体を掘削していった。

尋常ではない再生能力も、攻撃箇所を炭化させるほどの熱量を秘めた斧の一撃や、骨肉もろとも叩き潰す連打や、岩盤を掘削するような連突の前には、本領を発揮できないようだ。

むしろグチャグチャにされた箇所が歪に再生してしまう事で、動かしにくくなっている部分もあるらしい。

そんなミノ吉くんと肩を並べて前線に立つ【巨人王】の戦闘は、【光武王子】と【闇法王女】に似ていた。

いや、兄妹を鍛えたのは【巨人王】なのだから、兄妹が【巨人王】に似た、と言うのが正しいのか。

【巨人王】は兄妹と同じく両手に黄金の甲輪を装備している。これは国宝の一つであり、【幻想】級に分類される【巨神の甲輪】だ。

【巨神】の血統に連なる者だけが装備可能なこの黄金の甲輪は、装着者の身体や魔力を大幅に強化し、なおかつ魔力を物理的な破壊力に変換する能力があるらしい。

膨大な魔力を秘めた【巨人王】が操ると、シンプルな能力だけに強い。

轟風と共に繰り出される巨拳は龍鱗を碎き、衝撃が内部に浸透して周辺を破碎する。凝縮した魔力が第三第四の腕を形成し、その掌には高速回転する魔力鋸が生成され、残忍なまでに骨肉を裁断した。



【光武王子】のように技を修め、【闇法王女】のように術を使う彼はあらゆる面で隙が無く、ただ一心不乱に魔拳を叩き込んでいく。

それに対し、ミルガルオルムもまた強かった。

初撃で痛打を与えられた事で、戦況はこちらに有利になったかと思っただが、こいつは生命力自体が尋常ではない。

そもその防御力が高いせいでダメージを負わせる事自体が困難なので、話に聞いていた通り、巨人の軍勢でも仕留めるのは至難だろう。むしろ、数が多ければ多いほど混乱したり、戦況が見極めにくかったりするかもしれない。

また、行ってくる攻撃は全て規模が大きいものだった。

毒牙からは、ひと吸いすれば即死し、触れれば溶け落ちるような死毒を、周囲が沼のようになって瓦礫が沈むほど大量に噴出する事に始まり。

黒雲を生み出して数千の雷を降らせる魔術を行ったり、口を裂けるくらいにまで開いて丸呑みしようとしてきたり、あるいは棘鱗に触れたモノを粉々にする超振動状態で這いずり回ったりする。また、十八ある蛇眼は特異な能力を秘めている。目を合わせれば即座に、そうでなくても継続的に見られれば、身体が石に変わる【石化】や燃え出す【炎焼】、自分自身を見失い廃人にならない【意失】などの状態異常が発生してしまう。

中でも最も強力だったのは、尾で身体を支えて全身を空に向かう柱のようにピンと伸ばし、雲を貫いた後、圧縮した魔力を巨大な頭部に纏った状態で地面に突っ込む攻撃だ。

巨大な質量を天高くから高速で叩き落とすそれは、単純ながらも威力絶大である。

巨大隕石が落下したかのような、あるいは空が落ちてきたかのようなこの一撃で、《樹栄古都テイタンマギア》は呆気なく崩壊した。

ただでさえそれまでの攻防で壊滅的な状態になっていたが、地面は薄氷を踏み砕いたかのようにめくれ上がり、噴煙が天高く立ち上り、飛散した巨大な岩石や瓦礫の壁が押し寄せてくる。

規格外の巨体という特性を最大限に活用した攻撃だけに、ミノ吉くんでさえ受け止めようとすれば死ぬしかない破壊力である。防ぐ手段は乏しく、回避するしか選択肢はなかった。

地殻津波、という言葉が脳裏を過った。

そして、【神秘豊潤なる暗黒大陸】全土にまで影響を及ぼしたという地震の話は、この攻撃によるものだったのかと納得する。きつと【神秘豊潤なる暗黒大陸】という特殊な場所であれば、地殻を貫通するような攻撃なのだろう。

そんな一撃によって引き起こされた災厄が、回避不可能な範囲と速度で襲い掛かってくる。

これに対して何も手を打たないのは流石に危険すぎる。そう判断した俺は、皆よりも前に出た。幸い、サポートなどの関係上、それぞれと距離の差はあれど全員が俺の後方に集まっている。ば

らけていればカバーする事もできなかっただろうから、不幸中の幸いである。最前にいる俺が防げば、後方の被害はまだ抑えられるはずだった。

大地を踏み砕く一步と共に、【黒覇鬼王の金剛撃滅】や【森羅万象】などのアビリティを出し惜しみせずに使用してから、朱槍【^{グラディウス}グレイベル】の極槍を振り下ろす。

ある種の極致に至って繰り出した会心の一撃は、高速で迫りくる下手すれば雲よりも高い瓦礫の壁を、まるでモーゼの奇跡のように切り裂いた。

広範囲にわたって、俺の左右を凄まじい破壊の波が駆け抜けていくのを肌で感じる。だが俺が立っている場所はある種の安全地帯となっていて、後から後からやってくる瓦礫は欠片も飛んでこなかった。

しかし攻撃の規模が大きすぎるからか、たとえ勢いは大きく減しても、瓦礫同士の衝突などで飛散する軌道が変わり、後方への影響を完全に防げた訳ではなかった。

俺の近くにいた為に飛散する瓦礫の影響が少なかったカナ美ちゃん、分厚い魔氷の塊に籠もる事で衝撃を受けながらもやり過ごし、ミノ吉くん達は巨盾で防いだ。

【巨人王】もまた、飛来物を受け流して切り抜ける。多少傷を負っていたが、持ち前の回復力でどうにかなる程度に抑えられている。

それから少し離れた場所にいた赤髪ショートや子供達は、コクピット内に分体を仕込んでいたお

かげで何とか助かったという状態だった。

衝撃波だけで搭乗するギガトロールは城壁まで吹き飛び、追撃となる瓦礫の凶弾で装甲をボロボロにされ、何度も転がった事で四肢はもげて、もはやスクラップ状態である。

コクピットの衝撃吸収機能の限界を超えて掻き混ぜられた赤髪ショート達は、身体全体が骨折し内臓にもダメージがある。治療が間に合ったからよかったものの、分体が肉体を保護しなければ死んでいた。

一番離れていた鍛冶師さん達にも、瓦礫の凶弾が嵐のように襲い掛かった。しかし勢いが若干落ちていた事と、持たせた複数のマジックアイテムによる守護、それから密集した黒王守護巨竜人達が代わりに犠牲となった事で、ギガトロールはギリギリ動ける状態が残った。戦闘は無理だが、逃げるのは可能でまだマシだ。

損害なしで切り抜けられなかったのは失態だが、それでも最善の結果だったと思いつつ、さてどうするかと俺は頭を悩ませる。

普通に戦えば、どれほどの時間が必要になるか分かったものではない。恐らく、短く見ても数日は必要になるだろう。

しかしそれだと誰かが死にそうなので、俺は真面目に戦う事は止め、頃合いを見計らって山のうな尻尾の先端にとりついた。